



シビルサポートネットワークニュース

NPO法人シビルサポートネットワーク

2013年7月31日

2013年夏季号

本号の内容

- ☐ 夏に語る
 - ・副代表理事あいさつ
- ☐ 事業報告
 - ・(株)エイジェックのBCP策定支援終わる。
- ☐ 活動報告
 - ・第14回CSNサロン
 - ・建設系NPO連絡議会総会と講演会
- ☐ コラム
 - ・市民活動デビュー秘録
- ☐ トピックス
 - ・いまCSNホームページが面白い
 - ・CVSNのうごき
 - ・熱戦を撮ったもののプロにはかなわない

□ 夏に語る □

バイオマス産業都市構想

副代表理事 宇佐 洋二

本 NPO のバイオマス活用事業は、平成 19 年 1 月にバイオマス部会を発足させ(初代部会長小田義明さん)、今日に至っております。

国の施策である「バイオマスニッポン総合戦略」の一環として、バイオマスタウン構築のため

にバイオマスタウンアドバイザーの育成が平成 18 年に始まり、現在までで 184 名のバイオマス活用アドバイザー(名称一部変更)が生まれております。

これらの育成教育は、一般社団法人日本有機資源協会(JORA)の森澤



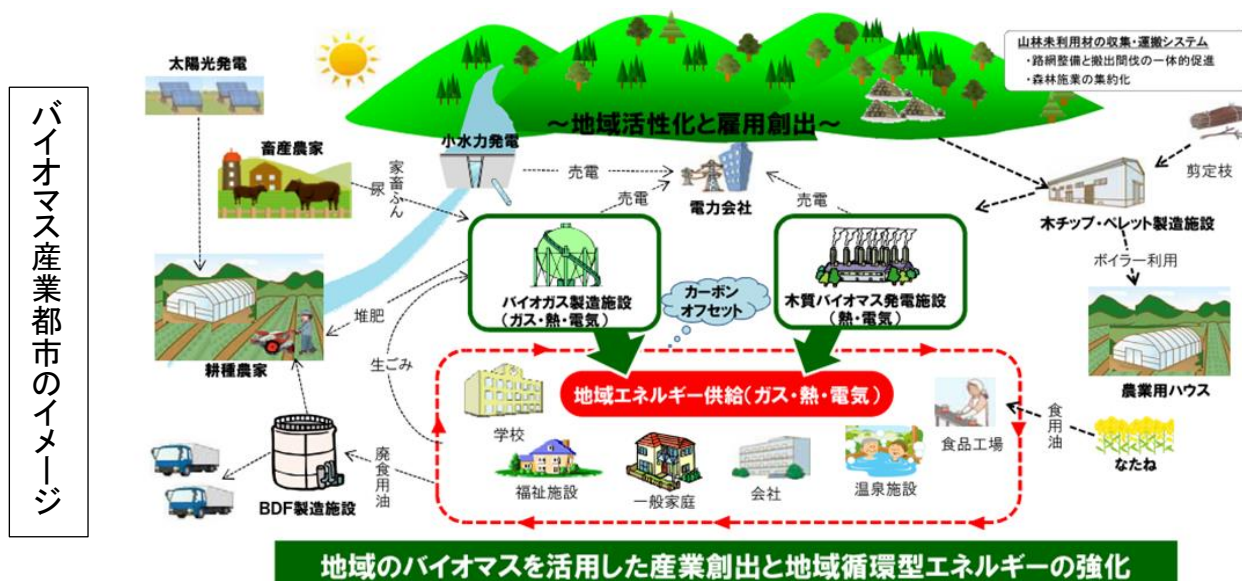
克彦さん(本 NPO シニアアドバイザー)を中心に進められてきました。

バイオマスタウン構想の策定(目標 300 地区)は、平成 23 年 4 月末には 318 地区となり、目標を達成いたしました。

また、同年 2 月には「バイオマスの利活用に関する政策評価」が総務省により行われ、バイオマスタウン構想に掲げる取組のうち、構想どおりに実施されているものは 35.3%にとどまると勧告されました⇒事業化への取組が弱いと判断された。

勧告を受け、農林水産省のバイオマス関連補助事業が平成 23、24 年度と 2 年度に渡り中断し、我々アドバイザーは実質上活動ができにくい状況になりました。

24 年 9 月に「バイオマス事業化戦略」が発表され、技術とバイオマスの選択と集中による事業化の推進がうたわれ、具体的にはバイオマス産業を軸とする環境にやさしく災害に強いまちづくり・むらづくり(バイオマス産業都市)の推進となっています。



政策目標として⇒

- ①地域資源を活用した産業創出と自立・分散型エネルギー供給体制の強化
- ②2020年に約2,600万炭素トンのバイオマス利用と、約5,000億円規模の新産業創出となっています。

この政策は、東日本大震災および福島原発問題等から、エネルギー利用を前提としたバイオマスの利活用事業の創出をめざしており、今までのバイオマスタウン構想に代わり、「バイオマス産業都市構想」の策定が求められています。



メタン発酵・発電施設

構想書の策定および事業化に際しては、補助金を利用することもできます。

構想の主体の中に民間事業者が加わることも可能となり、事業化を前提とした計画作りになります。

我々も事業化計画や事業発注のためのアドバイザーの実績を有しており、JORAで自治体の計画支援進めて来られた森澤さんの加入されたこともあり、組織的な運営（現在は個人対応）が可能となれば今後大きな飛躍が期待されます。



木質バイオガス発電施設

□ 事業報告 □

㈱エイジェックへの BCP 策定支援個別指導終わる

CSNとBCP業務委託提携している㈱エイジェックは、自社自身のBCP策定に取り組み、7月25日にこれまでの成果をまとめて報告会をおこなった。

CSNは、4か月間のべ9回にわたり策定を支援した。

我われのBCP策定支援事業は、原則として工業団地などの複数企業を対象におこなってきたが、今回は単独でしかも計画の作り込みまで携わる形となった。

それだけに、従来の講義様式にはなかった問題も生じ、支援側としても学ぶものも多く、今後の策定支援活動にむかってよい経験となった。



人材派遣会社のBCP策定は前例が少ない。同社の古後社長も「実戦に役立つ計画にする」と報告会席上で宣言したので、計画完成がおおいに期待される。

□ 活動報告 □

第 14 回 c s n サロン報告

伸び行く航空業界と空港を巡る諸問題
— LCC も影響大 —

世界の航空旅客数は、一貫して増加傾向にあるが、国内は旅客・貨物とも減少に転じている。が、格安航空会社の参入など新しい動きがでてきた。

第 14 回サロンが、7 月 8 日（月）15 時から、オリンピック記念青少年総合センター 104 会議室で開催された。

講師は、空港施設株専務取締役 星 弘行氏である。氏は、日本開発銀行（現日本政策投資銀行）に入行、審査部長、関西支店長、理事を歴任後、平成 20 年に同社に入社された。現在、経営企画全般を担当されている。

空港施設株はあまりなじみのない名であるが、東京国際空港をはじめ全国 13 空港の総合ビル、貨物ターミナル、格納庫、整備工場など航空関連施設を所有し、運営管理にあたっている。

また、銀行在職中から、わが CSN はさまざまなご指導ご鞭撻をいただき、いわば当 NPO の恩人というべき方である。

国内航空輸送は、大震災後の減少から脱しきれていないが、国際線の自由化や、LCC（格安航空会社）参入により、新たな航空旅客が生まれているという。

現在でも、ピーク時には 2 分に 1 回の離発着回数で限界に近いので、変化に対応できるさまざまな取り組み（首都圏空港の機能強化、鉄道アクセスの整備、LCC の参入促進、空港経営改革、関空等の再生・強化…）



星 弘行氏

の紹介があった。

また、持参された 60 ページにおよぶ参考資料は、一目で状況が把握できるよく吟味された内容で、これらとあいまってじつに中味の濃いおはなしを聞かせていただくことができた。



懇親会も 盛りあがって

いつもの〔レストランとき〕にて。講演の出席者も過去最多の 20 名で、とても楽しいひとときでした。



建設系 NPO 連絡協議会総会 記念講演会報告

正式名称決定 シビル NPO 連携プラットフォーム (CNP)

昨年4月に発足した建設系 NPO 連絡協議会の活動も1年が経過し、さる4月25日土木学会講堂にて平成25年度総会と記念講演が開催された。総会には、設立発起人の一人でもある辻田代表が出席し、その後の記念講演会には宇佐、小川の2氏が参加した。

そもそも、この連絡協議会は建設系 NPO の活動を支援する独立した組織としての中間支援組織の立ち上げをめざした組織として発足したものである。

本総会で、中間支援組織としての名称と代表となる会長が決定された。中間支援組織の名称は、「シビル NPO 連携プラットフォーム (CNP)」と決定された。これは、辻田代表が提案した「シビルテクニカルプラットフォーム」の名称を基本に「テクニカル」の文言を「NPO

連携」と置き換えて命名されたものである。この中間支援組織が、建設系 NPO の様々な活動のプラットフォームとしての連携機能を果たす組織であるという、強い思いが込められたものです。

この組織の主体が、建設系 NPO であることを示す目的で「シビル NPO」をいれ、かつ今後「新しい公共」を推進するうえで様々な組織との協働は重要であるところから、それらと連携をはかるプラットフォームを意識して「シビル NPO 連携プラットフォーム(CNP)」と決定した。

これまさに、建設系中間支援組織のプラットフォームに相応しい適切な言葉である、との多くの賛同をえての決定であった。

会長に、山本卓郎元土木学会長

中間支援組織の代表として、山本卓郎元土木学会長が決定された。山本氏は昭和16年生まれの72歳、東京大学土木工学科卒業で

国鉄の出身、JR東日本常務取締役、平成23年度の第99代の土木学会の会長を歴任された。また、山本氏は、自ら(社)未来のまち・交通・鉄道を構想するプラットフォームを主宰されている。

記念講演 新しい公共と NPO 法人中間支援組織の役割

「市民フォーラム 21NPO センター」事務局長の藤岡喜美子氏にご講演いただいた。

講演では、とくに今後の中間支援組織活動に重要な事業機会と、財政的課題について話されました。

よくある中間支援活動はソフト面の活動が多く、我々のめざしているハード、ソフト両面の活動を支援する組織には大いに期待をしています、とのお言葉もいただいた。

五十数名の参加者をいただき盛会であった。

また、記念講演の後は新会長およびゲストの藤岡氏を囲んでの懇親会が開催され、今後



設立される中間支援組織への活動の期待についての話の輪が広げられた。

□ コラム □

市民活動デビュー実録

— そこには
心地よい人生が待っていた(上) —

辻田 満

地域デビューのきっかけ

人生の第二ステージは定年の無い「生涯現役」の活動がしたい一念で今から9年ほど前に大学の同窓会を母体に都市・環境分野のシニア技術者と事業型NPOを立ち上げました。環境問題、防災問題や社会資本の維持更新等について、研究活動や技術支援事業を関東地域内で行っています。会員は30数名いますが吉川市に在住しているのは私一人です。

私が代表理事で、かつ事務所を私の自宅の一室としている都合上、登録は吉川市に活動拠点があるNPO法人となっています。そのような経緯で今から7年ほど前に吉川市からNPO連絡会を立ち上げる案内が私に届きました。その時、私は「多少は地域とのかかわりをもっておこうか」との本当に軽い気持ちで参加したのでした。思い起こせば、それが吉川市での市民活動に関わるきっかけでした。

NPO連絡会での活動

私の手元にあるNPO連絡会参加申込書の控えを見ると参加に当たって「行政の思惑で進めることの無いようにして欲しい」と一言記されていました。いま振り返るとやはり行政が全てお膳立てをした会議の進め方を最も懸念していたのです。NPO連絡会は初日から行政も市民のリードで会議を進めさせようとの思いが強く感じられました。そして、その姿勢は現在でも少しも変わっていません。むしろ、市民側が行政に依存することなく、もっと自主的に動かなければならないことを多くのメンバーは感じているし、行政側も同じ思いでいると思います。

さて、NPO連絡会をどのような組織にするのかの議論がありました。ある方はNPO活動推進市民会議（中間支援組織的役割）を持たせた組織とすべきとの提案があり、私は中間支援的役割の組織は別に作ることが必要で、このNPO連絡会は代表や規約もない自由な学習の場であり情報交換や相互扶助の場としてはとの提案をしました。結果的に現状は当時私がイメージしていたような組織運営が継続されていますが、果たしてその時の行政の真意はどうだったのでしょうか。

私は行政がNPO連絡会を立ち上げた狙いは三つあると思っています。

一つは中間支援組織の立ち上げ、二つ目は市民と行政との協働指針作り、三つ目は指定管理へのNPOの参加です。前者の二つは「中間支援組織NPO ネットよしかわの創設」と「協働に関する基本指針の策定」と既に形となりました。三つ目の目的はまだ形にはなっていませんがこれから何年か後には必ず形になって現れてくると思っています。僅か数年足らずでこれらの成果と共に、NPOフォーラムを毎年開催し、誕生した中間支援組織（NPO ネットよしかわ）と協働事業でコミュニティアクションカレッジの開催や地域ポータルサイトの立ち上げ、市民討議会の開催等、振

なまず食べ古に思いを馳せる川辺の街
吉川市

埼玉県東南部人口67,000人の、江戸川と中川にはさまれた水と緑が豊かなまち。古くは舟運で栄え、なまず料理で知られている。

筆者が住む吉川きよみ野は、「人にやさしい街づくり」をコンセプトとして昭和63年から開発され、都市景観大賞・彩の国さいたま景観賞を受賞するなど、美しく落ち着いた街並みを形成している。

(参考資料:wikipedia)

り返れば行政の狙い通りに進められたのではないのでしょうか。

よしかわ NPO フォーラムのこと

NPO 連絡会が立ち上げられてまもなくそれぞれの参加団体の主催行事を中心に第 1 回 NPO フォーラムを開催しました。私の参加団体であるシビルサポートネットワークでは「安全・安心・元気な地域社会をめざして」なるテーマでパネルディスカッションを行いました。

わたしが、コーディネーターを勤め、パネリストに吉川市で活動している主だった NPO 活動団体の代表の方 4 名と行政からは市民活動を所管している当時吉川市民生活部の椎葉部長に参加していただきました。



第 1 回 NPO フォーラム(2007 年)の
コーディネーターをつとめる筆者(左端)

その時の記録を見ますと椎葉部長からは「①総合振興計画の中に NPO との協働を位置づけている。②市民参加が条件、行政と市民双方の意識改革をしていかなければならない。③行政側の専門分野の人材不足、市民の人材発掘が必要。④行政サービスは行政だけの問題ではない。⑤公共性の検証と NPO への委託、市民からの提案、そのための条件づくり。⑥皆が参加できるきっかけをつくりたい。⑦目指すは住民自治」と素晴らしい多くの発言を頂いた記録が残されています。

しかし、これらを実現していくためにはまだ相当な時間と行政・市民両者の相当な努力が必要だと感じています。

翌年、第 2 回 NPO フォーラムが開催されました。メインイベントは協働シンポジウムで法政大学の広瀬先生の基調講演と協働座談会でした。

協働座談会には広瀬先生その他吉川市協働指針策定合同会議の委員会の 3 名の方が登壇していました。

私はフロアーからこの 3 名の方に次のお願いをしました。「過去に吉川市において協働に相応しい事例が二つありました。一つは市民交流センターおあしすの建設に関わる協働と、もう一つは吉川市における男女共同参画の取り組みの協働です。この両者共既に十数年が経過する中で、当初の協働の狙いと現状がどのようなもの

になっているのかの検証をまずお願いしたい。」

これに対して委員側からは「しっかりと検証したい。」との回答を頂きましたが、果たしてその検証はしっかり行われたのでしょうか。

そして第 3 回 NPO フォーラムではパネル展示とステージ発表がメインイベントとして行われました。シビルサポートネットワークは「吉川新都心構想」を発表しました。

この提案は吉川の両隣の越谷市と三郷市にオープンした巨大ショッピング施設に吉川のまちが呑み込まれないようにまた、吉川に新たに建設される新駅を最大限に活かした次世代型路面電車(LRT)を基軸としたまちづくりの提案です。

このイベントには多くの行政の方々や市議員・市民の参加がありましたが、いまだ本提案に関しての反応はゼロに近い状態で、これが吉川市の本質かと寂しい限りの心境です。

この NPO フォーラムもその後毎年開催され、今年は NPO 連絡会で 1 年かけて学習してきた「自治基本条例」をテーマにシンポジウムを自治会関係者の多数の参加を得て盛会に開催しました。とにかく、この種の市民活動は継続することが本当に重要であると感じました。

(以下、秋季号に掲載)

□ トピックス □



CSN のホームページを現在のデザインに全面改定して、早いもので5年が経過した。

会員のみなさんは、時々でもご覧いただいているだろうか。毎年、少しずつであるが更新し、新しい情報を掲載している。

最近では、当ホームページを訪問される方は、年間1万人を超えている。

とくに、バイオマス活用推進事業のページに公開しているPDF「バイオマス産業都市構築」は、幅広く多くの場で参考資料としても活用されている。

また、「CSN について」>「CSN アーカイブ」には、活動報告100号記念号や今年度発行の季刊誌を公開している。過去のさまざまな活

成果としての資料が掲載されているので、お時間があるときご覧いただきたい。

「CSN について」>「定款・規定」のページには、最新のCSNパンフレットがPDFで公開されている。これを両面印刷して、ぜひともCSNのPRにご活用をお願いしたい。

「地域とのパートナーシップ」のページは、CSNが活動拠点である埼玉県吉川市で行っている地域活動について報告されているので、お読みいただきたい。

「ホーム」の表紙のページの「お知らせ」には、直近のイベント情報も掲載してある。ホームページに関しまして、ご意見やご感想などを事務局までお寄せいただければ幸いである。



CSN のうごき

行事・イベント	実施日	参加者
事務局定例会議	5/3、6/7、7/1	辻田、宇佐、高橋
建設系 NPO 連絡協議会運営幹事会	5/16、7/23	辻田
建設系 NPO 連絡協議会総会・講演会	6/24	辻田、宇佐
よしかわまちづくりオープンサロン	5/18、6/15 7/20	辻田
平成 25 年度第 1 回役員懇談会	7/8	辻田、宇佐、高橋、舌間 鈴木、出崎、小川
第 14 回 CSN サロン	7/8	20 名
活動報告季刊誌第 2 号発行	7/30	



炎天下

熱戦を撮ったものの プロにはかなわない 高橋 肇

真夏の炎天下、女子オープンテニス大会の写真係（以下、アマ）を務めた。テニス雑誌からもカメラマン（以下、プロ）が取材にきた。幸いにもプロが撮った写真データをもらうことができた。同じ被写体を撮っているのに、作品のできばえの差は、あまりにも歴然としている。似た写真を、プロとアマで比べてみる機会はあまりないように思うので、恥をしのいでその違いを報告したい。

大会は、7月9日から14日までの6日間おこなわれた。この1週間だけ、連日35度の猛暑にみまわれた。にわか仕込みの写真係は、この間プロとならんで試合を撮り、最後には熱中症でダウンしてしまった。

この大会は、地元のテニス協会主催ながら、日

本テニス協会（JTA）公認の公式戦である。

賞金総額や参加選手数から決められる大会グレードは、公式戦の中堅どころに位置づけられている。

この晴れの舞台に、なぜ写真係になったかという、テニス協会事務局関係者でデジタル一眼レフカメラを持っているのはわたしだけだったからだ。決して、腕前をかわれたわけではない。

撮影位置は、アマはスタンドから写す。プロは、コートに入行って行ってベンチ脇で撮る。スタンドからいくら望遠でとって、迫力は選手の横でとったものにはかなわない。スタートからして、もう違っているのだ。とはいえ、試合中にベンチサイドにするすると近寄るのはむずかしい。プレーに影響しないように動くタイミングが微妙である。気おくれしてなかなか入っていけず、4日目にやっと慣れた。



これは、スタンドから撮ったものだ。

以下、左側の写真がプロ（yasuragi とクレジットが入っている）、右がアマ（わたし）である。

まず、画面の鮮明度の違いがよくわかる。カメラとレンズの差であろうが、機材を比べると、まるで大人と子どものように違う。プロはこれで食っているのだから、これは仕方がないとあきらめざるをえないところだ。

つぎに、シャッターチャンスの巧拙がわかる。プロは、サーバーのラケットがまさにボールにあたる瞬間をとらえている。アマのシャッターは、サーブを打ち終わりボールがネットのあたりまで

飛んだ時に切られている。それに、タイミングがずれたので、サーブする選手のフォームも格好悪い。

スポーツシーンにおけるシャッターチャンスとピントは、おそらく技術的にプロとアマと差別するいちばん大きな要素だろう。このことは、この写真だけでなく、本篇にでてくる写真全部にあてはまる。

カメラを構えて動く被写体を追っていると、「これは、いける！」という瞬間がくる。すかさずシャッターを押すのだが、写っているのは、ピークをすぎた後姿ばかりである。「これは、いける！」の瞬間、プロは「これは、…」で、アマは「…、いける！」の部分でクリックするのであろう。



右の写真は、アマとして、タイミングよし、動きダイナミックで、かなりの自信作だったが、プロとくらべるとやはり違いがある。

画面の印象が、アマはのっぺりとして平面的、プロは深みを感じる。それは、背景がぼけている（後ぼけ）からだ。みどりの側壁が目立たないようにうまく処理されている。さらに、この写真ではわかりづらいが、プロの原画をみると、なんともいえないやさしい光にあふれていた。後ぼけと光の処理、シロウトには難問である。

こんな美形を、9面で一斉に始まるゲームのなかからさっと見つけて、目立たないようにしてベンチサイドに入りこむ技は、さすがベテランプロ！



同じ被写体であるが、撮影日が違う。

上段の作品と同じように、プロの画面は陽光にあふれている。この選手は準優勝ペアであるが、励ましあいながらリラックスする様子が伝わってくる。

アマの写真は、これだけを見ると悪くはないが、プロとくらべれば、ただのスナップ写真に見えてくるから不思議である。

下段は、シングルス決勝の試合前の撮影である。アンパイアの説明が終わった直後、プロが選手にひとこと・ふたこと話しかけてさっと撮った。あまりの素早さに、アマはこのシーンを納められな



った。主催者側カメラマンなのに、大事なポイントをおさえきれなかったのである。

しかし、あまりにもきれいに写っているので、アマもこのシーンをどうしても撮りたくなり、翌週

おこなわれた中学生大会の決勝戦で同じように撮ってみた。だが結果は、一目瞭然、意気込みをみごとに裏切られてしまった。

プロをみてみよう。背景は例によってうまく処理され、審判台などの目障り障害物も人物の裏に隠されている。フラッシュも使われて、選手たちが画面のなかで際立ってみえる。

一方、アマはその正反対である。写真では判然としないが、ピントが後ろのスタンドに合ってしまい、選手の顔がピンボケになってしまった。これは致命傷である。バックもごちゃついている。

ひとことでいうなら「撮る前に考えていない」ということだ。これは、たぶん今回の総括になるのかもしれない。

さて、あすが決勝という5日目、35度のひなたでの連日の撮影がたたって、熱中症になってしまった。最終日は、なんとかコートに来たものの日かげにしかいられない。決勝戦はスタンドからの撮影にならざるをえなかった。せっかくプロの技を盗み見してこの日に備えたのに、大会初日のレベルに戻ってしまったのである。



だが、ありがたいことに、プロが決勝戦の迫力あふれる作品を、ご自分のクレジットを消して貸してくれた。こうして、大会報告書は「よく撮れた」写真で飾られることとなった。

最後に、この写真を…

公式戦ということで、準決勝戦からチェアアンパイアがついた。そのご本人にこの写真をあげた。ご主人が、「プロに撮ってもらったの？」と言ったそうだ。

第 15 回サロンのお知らせ

平成 25 年 10 月 14 日（祝）

地方自治体の危機管理

講師：習志野市危機管理監 太田 清彦氏

編集後記

・夏季号の編集は、辻田さんや宇佐さんの原稿は早くからいただいていたが、熱中症以降アタマの回転がいまいちで“熱中”できず、いつもと同じようにぎりぎりになってしまった。

・本号に、テニスと写真の駄文を載せた。全体に硬い記事が多いので、一つぐらいソフトなものがあったてもいいのでは…とのことで

書いてみたが、ソフトはいいけど、あまりにも CSN とかけはなれたテーマではないか？との思いもある。みなさんは、どう感じられるだろうか。

・これから、夏本番。くれぐれも、熱中症にご用心！

事務局：高橋 肇